

世代差と表記差

——院政後期・鎌倉初期書写の仮名書状のハ行音表記を視点として——

金子 彰

目次

はじめに

一、世代差を視点にして

- (1) 従来の研究
- (2) 問題の設定
- (3) 分析資料

二、世代差と表記差

- (1) 平安後期に生まれた世代の表記
- (2) 院政期前期に生まれた世代の表記
- (3) 院政期中期に生まれた世代の表記
- (4) 院政期後期に生まれた世代の表記

三、書写年代と書写者の年齢 むすび

はじめに

鎌倉時代（院政・鎌倉・南北朝）の言語を記述しようとする場合、その記述方法の主なもの、例えば、

築島 裕博士『平安時代語新論』（東京大学出版会、昭和44年6月）

小林芳規博士『中世片仮名文の国語史的研究』（広島大学文学部紀要特輯号3、昭和46年3月）

等に示されている如く、奥書や識語の書写年代を頼りに、当該文献の言語を記述して、各年代に位置づけていくものであろう。書写年代の明確な文献を中心に据えて、年代順に配列した文献から帰納される言語事項をもつて、各時代、各時代の傾向を述べるものである。奥書や識語の年代と、当該文献の言語とが、その時代の特徴に一致しないで「書記された時代よりも古い時代の国語が伝承されている」という、訓点語研究の指摘もあるが、本稿では、別の角度から、鎌倉時代語の記述の精密化を試みてみたい。

「世代差」（約三〇年）を一つの視点として、奥書に記された書写年代だけでは、充分説明出来なかつた問題に迫ってみたい。

一、世代差を視点にして

(1) 従来の研究

先学の研究に於て、部分的ではあるが、この視点に関する発言が散見される。しかし、それらは、「世代差」を統一した、一つの視点とした文献研究の方法としたものではあり得なかつたようである。

築島裕博士『平安時代語新論』（338頁）

「凡そ音韻の歴史的变化といふものは、政治的事件などの如く、一時に統一的に生ずるものではなく、古い音韻体系を持つ世代と、新しい音韻体系を持つ世代とが交替することによつて変化は完成するものと見るべきである。（中略）昌住自身の音韻体系の中で、コノ二類が区別されてゐることの発現であり、昌住は、コノ二類を区別した最後の世代であつたかと解することが出来よう。」

馬淵和夫博士『国語音韻論』（笠間書院、昭和46年、50頁）

「(前略)『和名類聚抄』(承平四年、九三四)には区別がなく(金子注、ア行、ヤ行のエ)それとほとんど同時に出来た『土左日記』にはその区別がまもられているのは不思議なようであるが、これは承平四年において順は二十四才、實之は六十才以上の老齡であつたらしいことを考えれば一応理解できることである。」

佐藤武義氏「書評」小林芳規編『法華百座聞書抄総索引』（『国語学』14、昭和51年）

「小林氏の論考は(中略)『デ』について、講師の説話、説教の本文に『ニテ』を用い、抄写者の私語に『デ』を用いるのは、言語使用の場の相違かとされたことは、示唆的な指摘と思われる。(中略)この新生面を講師との関りで考えるとすれば、宗派の違いで考えるよりは、新語が若い世代によってになされる点から講師の年齡が考慮されるのではなからうか。本書で、年齡がはつきりしている者で中世語を用いているのは四十三歳の覚譽、四十六歳の香象房(信永)であり、用いていないのは六十三歳の永縁、五十二歳の覚嚴となり、その差が一応はつきりしているのである。このような講説資料では講者の年齡は考慮されるべき条件ではなからうか」

このように、諸書に世代差を視点とした考察が見られる。佐藤武義氏の言われる、四十代と五十・六十代の言語比較に疑問を持たないではないが、ともかく、文献の書写者又は登場人物の年齡・世代が、一つの視点として、国語史記述の重要な要素となり得るようである。

(2) 問題の設定

語中・語尾に於けるハ行音とワ行音の統合を問題とする。この問題に関して、次の二氏の発言を取り上げ、「世代」を視点として、充分解明出来なかつた点に迫つてみたい。

築島裕博士『平安時代語新論』（354頁）

「室町時代末期には、キリシタン資料に vomoururu (思はるゝ) vouatte (終つて) のやうに、殆どすべての語につい

て、語中語尾の、古くハだった音節を wa (wa) と表記してゐることから、その当時はこの音韻変化が普遍的に滲透してゐたことが明に知られるが、このやうな普遍的音韻変化が何時の時代に完了したものかは、尙未確定の問題と言はねばならない。少くとも、平安後期に既に完了したとは、確言し得ないと考へられる」

山内育男氏「かなづかいの歴史」(『國語史』2音韻史・文字史)大修館、昭和47年、561頁)

「十一世紀後半から十二世紀前半にかけての年代は、文節中にハ行語音を保有する世代とせぬ世代との交替期に相当したと見るのが事実に近いのではあるまいか」

尚、築島博士は、次の様に時代区分をされる。

平安後期 一〇〇一—一〇八六年

院政期 一〇八七—一一九一年

今これに従えば、十一世紀後半から十二世紀前半は、平安後期の最終期頃から院政期の初中期頃と言うことになる。築島博士は、院政期を平安時代に包括されるが、院政期は鎌倉時代のスタートと位置づければ、語中・語尾のハ行音の問題は、鎌倉時代の夜明けの時期の、表記の一解明の問題となる。

(3) 分析資料

本稿では、漢字交り平仮名書状を取り上げる。仮名の文学作品や訓点資料に於ては、前者が転写に問題があり、後者が移点に問題を残し、書写者の生の形での表記を把握し難い場合がある。その点、ここで取り上げる平仮名書きの書状は、書写者の保有する音韻状況とその表記法が把握し易いものとの認識の元に、次の仮名書状を分析する。

久曾神昇博士編『平安時代仮名書状の研究』(風間書房、昭和43年10月)

所載の次の条件に適するものを分析する。

ア、書写者が明確なもの、しかも、書写者の生没年と書写時が判明しているもの。(年齢は満年齢とした)

イ、翻字のみではなく、写真版が掲載されているもの。翻字版に依った場合は、その旨明記する。(本書掲載順に以下示す。)

1、藤原為房書状(永承四年生・一〇四九〜一一〇〇頃没)

○一〇八五年 (36歳) 書写 7通

○一〇九〇年頃 (41歳頃) 2通

2、藤原為房妻書状(同右頃生没)

○一〇八五年頃 (36歳頃) 40通

○一〇九二年頃 (43歳頃) 3通

為房妻の生没は未詳であるが、常識的に判断して、ほぼ同年齢と見て同世代人として扱う。

3、皇嘉門院御処分状(第31図)(保安三年生・一一二二〜養和元年・一一八一)

○一一八〇年 (58歳) 1通

4、後白河法皇宸翰書状(第32図)(大治二年生・一一二七〜建久三年・一一九二)

○一一八一年 (54歳) 1通

5、源頼朝書状(久安三年生・一一四七〜正治元年・一一九九)

○一一八〇年 (33歳) 1通 尊敬閣文書、平安遺文「五〇六五」

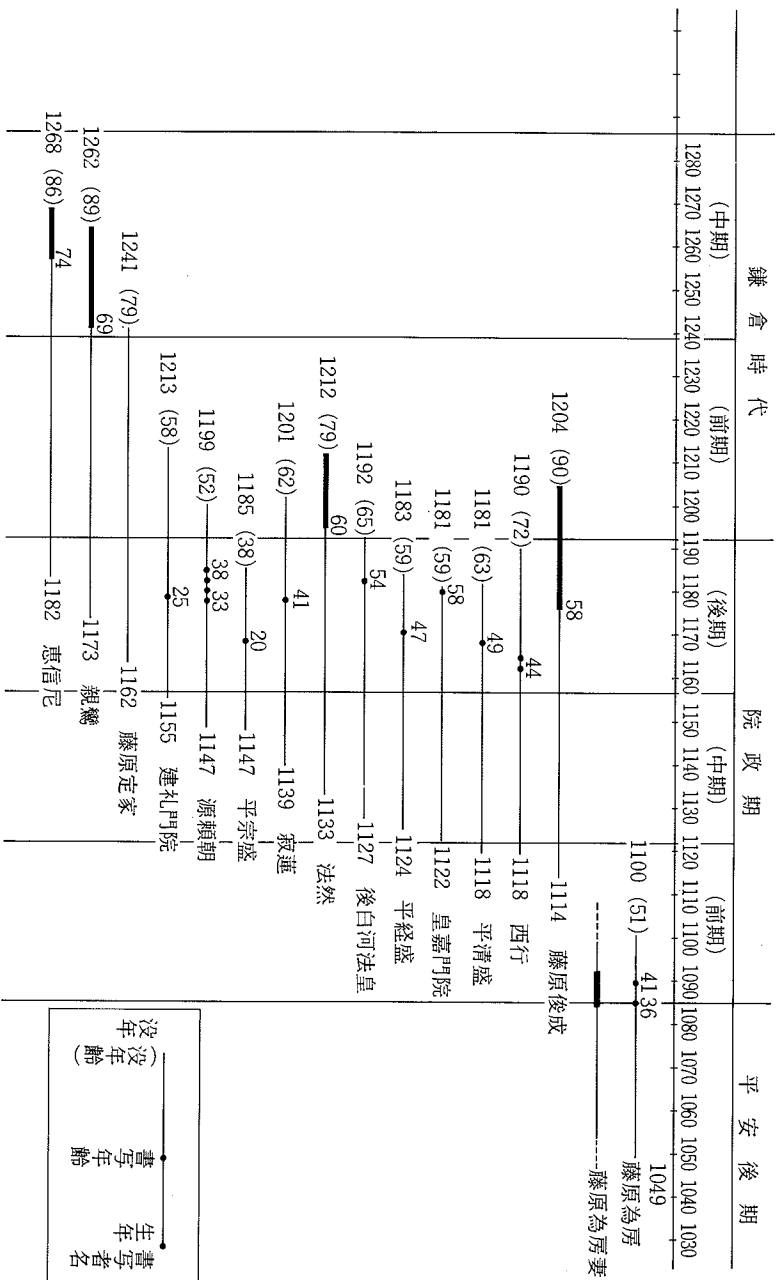
○一一八三年 (36歳) 1通 神護寺文書、平安遺文「四一四八」

○一一八四年 (37歳) 1通 崎山文書、平安遺文「四一六一」

○一一八五年 (38歳) 1通 熱田神宮文書、平安遺文「四二三四」

○一一八五年 (38歳) 1通 長沼賢海氏蔵、平安遺文補「二五二」

- 一八五年 (38歳) 1通 荒卷福吉氏藏、平安遺文補「一五四」
- 6、藤原俊成書狀(永久二年・一一一四〜元久元年・一二〇四)
 ○一一七二年〜一一八二年頃 (58歳〜68歳) (第35図) 1通
- 一一七六年 (62歳) (第36図) 1通
- 一一九二年以降 (78歳以降) 1通 日暮帖所載、久曾神昇博士翻字に依る
- 一二〇三年 (89歳) 1通 日暮帖所載、久曾神昇博士翻字に依る
- 7、寂蓮書狀 (第37図) (保延五年生・一一三九〜建仁元年・一二〇一)
 ○一一八〇年 (41歳) 1通
- 8、平清盛書狀 (第200図) (元永元年生・一一一八〜養和元年・一一八二)
 ○一一六七年頃 (49歳頃) 1通
- 9、平経盛書狀 (第201図) (天治元年生・一一二四〜寿永二年・一一八三)
 ○一一七一年頃 (47歳頃) 1通
- 10、平宗盛書狀 (久安三年生・一一四七〜元暦二年・一一八五)
 ○一一六七年 (20歳) 1通 平安遺文亡「三四二六」
- 11、建礼門院御書狀 (第202図) (久寿二年生・一一五五〜建保元年・一二一三)
 ○一一八〇年頃 (25歳頃) 1通
- 12、西行書狀 (第205・206図) (元永元年生・一一一八〜建久元年・一一九〇)
 ○一一六二年頃 (44歳頃) 1通
- 一一六二年〜一一六四年頃 (44歳〜46歳) 1通



更に、『平安時代仮名書状の研究』には掲載されていないが、次の三者の仮名書状も取り上げる。

13、法然書状・起請文 (長承二年生・一一三三〜建暦二年・一二二二)

○一一九三年〜一二二二年 (60歳〜79歳) 5通 『法然上人真蹟集成』(法蔵館)に依る

14、親鸞書状 (承安三年生・一一七三〜弘長二年・一二六二)

○一二四二年〜一二六二年 (69歳〜89歳) 12通 『親鸞聖人真蹟集成』第四卷(法蔵館、昭和49年)に依る。

15、恵信尼書状 (寿永元年生・一一八二〜文永五年・一二六八)

○一二五六年〜一二六八年 (74歳〜86歳) 10通 『恵信尼文書』(法蔵館、昭和53年)に依る

二、世代差と表記差

(1) 平安後期に生まれた世代の表記

藤原為房と為房妻とが該当する。この夫妻は、平安後期でも、院政期に近い頃の生まれである。夫妻の和語に於ける語中・語尾のハ行音の表記は次の通りである。

1、藤原為房

(は) いそかはしき(忙)・うけたまはる(承)・おはす(御)・くはし(詳)・さふらは(候)・たまは(給)・つかは(使)・ならは(習)・よかは(横川)

(ひ) おもひ(思)・さふらひ(候)・したかひ(従)・たまひ(給)・つかひ(使)

(ふ) けふ(今日)・さふらふ(候)・きのう(昨日)

(へ) うへ(上)・かへり(返)・さふらへ(候)・たまへ(給)

(ほ) おほい殿(大殿)・いとをし(愛)

2、藤原為房妻

(は) あつかは(扱)・あはせ(給)・あはれ(哀)・あははす(表)・いは(言)・おはします(御)・くは(食)・くはへ(加)・さはやかなり(爽)・しはふき(咳)・たまは(給)・たまはる(賜)・たまはす(賜)・つかはす(遣)・なは(繩)・ならは(習)・ならはし(習)・ぬは(縫)・のたまはす(宣)・わらは(童)

(ひ) あつかひ(扱)・あひ(合)・いひ(言)・おもひ(思)・かひ(買)・かひくし(甲斐)・くひ(食)・こひし(恋)・たまひ(給)・つかひ(使)・てならひ(習)・まひ(舞)・わつらひ(煩)・うみくし(初)

(ふ) いふ(言)・かなふ(適)・けふ(今日)・たまふ(給)

(へ) うへ(上)・かへすく(返々)・かへり(帰)・くはへ(加)・くへ(食)・さへ(助詞)・たかへ(違)・たへ(耐)・たまへ(給)・ひとへ(単衣)・むかへ(迎)・をしへ(教)

(ほ) いとほし(愛)・おほかた(大方)・おほさ(多)・おほし(多)・おほせこと(仰)・おほん(御)・かほ(顔)・なほ(尚)

| 為房妻 | 為房 | 書写者 表記 |
|-----|-----|-----------|
| 20 | 9 | は |
| 0 | 0 | 転呼音 |
| 13 | 5 | ひ |
| ゐ=1 | 0 | 転呼音 |
| 4 | 2 | ふ |
| 0 | う=1 | 転呼音 |
| 12 | 4 | へ |
| 0 | 0 | 転呼音 |
| 8 | 1 | ほ |
| 0 | を=1 | 転呼音 |
| 57 | 21 | は行 |
| 1 | 2 | 転呼音 |

(数字は異語数を示す)

この夫妻の書状は、平安末から院政極初期に書写されたものである。わずかに、次の3語が

為房 Ⅱきのう・いとをし

為房妻 Ⅱうるくし

ハ行転呼を起した表記であつて、夫妻ともにその表記は、ハ行音表記が主である。しかも書状の量が為房妻は43通、為房は9通から見て、女性の方が保守的傾向を見せているとも判断できよう。同世代の夫妻が、三十歳代の半ばから四十歳にかけて書写した書状は、彼らの言語習得期（平安時代末期）から長い時間を経過しておらず、彼らの生の音韻状況が表われていると判断される。そう考えれば、平安末期の社会では、男女を問わず、語中・語尾に於けるハ行音とワ行音の統合が、それ程進行していなかつたであろうことが察せられる。

ただし、実際の音韻状況を、書記する文字にどの程度忠実に反映しているのか、という問題と、又、表記は学習して身につけるものであるということを考慮に入れれば、音韻と表記とのギャップが今一つの問題として残る。しかし、為房夫妻のハ行音表記全体を見ると、古く「ハ」だつた音節が「ワ」へと普遍的に音韻変化が完了していたとは言い難く、むしろ、大半は「ハ」だつた可能性の方が強いであろうと判断される。

(2) 院政期前期に生まれた世代の表記

院政期の一〇四年を、仮に三等分して前・中・後期に分けると、それは一世代に相当する長さとなる。その前期に属する者は藤原俊成・西行・平清盛・皇嘉門院・平経盛・後白河法皇のグループである。その表記を検討すると、前代の為房夫妻と同様、ハ行転呼を起こした表記が見あたらぬ。

俊成は4通、西行は2通であるが、全てハ行音表記なので一括して示した。年齢順に右から左へ（老↓若）と配した。

6、藤原俊成

（は）おはします（御）・おもはく（思）・さふらは（候は）・たまはり（給）

（ひ）おもひ（思）・候ひ・たまひ（給）・つかひ（使）・ならひ（習）・まよひ（迷）

〔ふ〕さふらふ(候)

〔へ〕かへらせ(帰)・かまへて(構)・候へ・さへ(助詞)・つたへ(伝)・むかへ(迎)

〔ほ〕おほさ(多)・おほせ(仰)

12、西行

〔は〕おはしまして(御)

〔ひ〕おもひ(思)

〔ふ〕さふらふ(候)

〔へ〕かへりこし(帰)

〔ほ〕用例なし

8、平清盛

〔は〕用例なし

〔ひ〕用例なし

〔ふ〕さふらふ(候)

〔へ〕かへられ(帰)・候へ

〔ほ〕用例なし

3、皇嘉門院

〔は〕おはさん(御)・思はれ

〔ひ〕用例なし

〔ふ〕いふ(言)・たかふ(違)

(へ) いへ (家) ・ おもへ (思) ・ たかへ (違)

(ほ) おほい殿 (大殿)

9、平経盛

(は) あはて (会)

(ひ) したひ (慕)

(ふ) けふ (今日)

(へ) 用例なし

(ほ) 用例なし

4、後白河法皇

(は) 候はん・さふらはむ・ものさはかしき (騒)

(ひ) おもひ (思) ・ 候ひ

(ふ) さふらはむ

(へ) うへ (上) ・ かまへて (構) ・ 候へ

(ほ) おほせ (仰)

この院政期前期に生まれ、この期を言語習得期とした人々は全員が、壮年か老年期に書状を書写している。即ち、書写時期は、院政期後期かもしくは鎌倉時代前期である。言語習得期(院政期前期)から、相当長い時間の経過があるにも拘わらず、ハ行音語のワ行音表記が見あたらないのは、次の二点を伺わせるようである。

○平安末と院政期前期との間には、大きな音韻の変化はなかったと推定できる。

○言語習得期から晩年まで、その表記傾向を変えらるゝことはなかったらしいこと。

| 後白河 法皇 | 平経盛 | 皇嘉門院 | 平清盛 | 西行 | 藤原俊成 | 書写者 表記 |
|-----------|-----|------|-----|----|------|-----------|
| 2 | 1 | 2 | 0 | 1 | 4 | は |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 転呼音 |
| 2 | 1 | 0 | 0 | 1 | 6 | ひ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 転呼音 |
| 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | ふ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 転呼音 |
| 3 | 0 | 3 | 2 | 1 | 6 | へ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 転呼音 |
| 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | ほ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 転呼音 |
| 9 | 3 | 8 | 3 | 4 | 19 | は行 |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 転呼音 |

(3) 院政期中期に生まれた世代の表記

この期に生まれたグループには、寂蓮、平宗盛、源頼朝、建礼門院が属する。彼らの表記を検討すると、院政期前期生まれの世代とは、少し様相を異にすることがわかる。即ち、彼らの書状には、ハ行転呼を起した表記が散見されるようになる。わずかに、平宗盛の書状（20才で書写）にのみ、それが見られない。

7、寂蓮

〔は〕候は・相いろわす〔弄〕

〔ひ〕はからひ〔計〕・あいいろい〔相弄〕

〔ふ〕用例なし

〔へ〕用例なし

〔ほ〕用例なし

10、平宗盛

〔は〕うけたまはり〔承〕・おはしまし〔御〕

〔ひ〕用例なし

〔ふ〕用例なし

〔へ〕候へ

〔ほ〕おほいと〔大殿〕・おほみのまき〔麻統の牧〕

5、源頼朝

○治承四年（33歳）書写

〔は〕さはかする〔騒〕・候はさらむ

〔ひ〕おもひ

〔ふ〕おもふ

〔へ〕いにしへ

〔ほ〕用例なし

○寿永三年(36歳)書写

〔は〕用例なし

〔ひ〕いひて(言)

〔ふ〕いふもの(言)

〔へ〕用例なし

〔ほ〕おほせ(仰)

○元暦元年(37歳)書写

〔は〕きは(際)・つかはす(遣)

〔ひ〕つかひ(使)

〔ふ〕たまふ・給ふ・申たまうへく

〔へ〕かへすく・給へは

〔ほ〕おほせられ(仰)・おほせ(仰)・いとをしく

○元暦二年(38歳)頃書写

〔は〕候はく

〔ひ・ふ・へ・ほ〕用例なし

元暦二年(38歳)頃書写

〔は〕候はめ・めしつかはせ(使)

〔ひ〕候ひしかは

〔へ〕おさへ(押)

世代差と表記差

| 建礼門院 | 源頼朝 | | | | | | 平宗盛 | 寂蓮 | 書写者 | 表記 |
|------|-----|---|---|---|---|---|-----|----|-----|-----|
| | 2 | 2 | 1 | 2 | 0 | 2 | | | | |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | は | 転呼音 |
| 0 | 3 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | ひ | |
| 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | ひ | 転呼音 |
| 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | ふ | |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | ふ | 転呼音 |
| 0 | 1 | 1 | 0 | 2 | 0 | 1 | 1 | 0 | へ | |
| 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | へ | 転呼音 |
| 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 1 | 0 | 1 | 0 | ほ | |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | ほ | 転呼音 |
| 3 | 6 | 5 | 1 | 8 | 3 | 5 | 4 | 2 | は行 | |
| 1 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 3 | は行 | 転呼音 |

（ほ）おほせ（仰）

○元暦二年（38歳）頃書写

（は）候は・給はり

（ひ）あひた（間）・ならひ（習）・はからひ（計）

（ふ）用例なし

（へ）候へは・うゑ（上）

（ほ）用例なし

11、建礼門院

(は) さふらはんする (候) ・をはしまし (御)

(ひ) うしかい (牛飼)

(ふ) さふらふ (候)

尚、平宗盛の「おほみのまき」は久曾神博士の解説に依れば、「麻続の牧」となっているが、その本来の音韻は未詳である。

この院政期中期に生まれ、この期を言語習得期とした人々が書写した書状は、全て二十代・三十代そして四〇歳までのものである。書写時期は院政期後期のものばかりである。しかも、前の世代(院政期前期生まれ)の人々とほぼ同時期に書状を書写しているわけである。書写時期は同じではあっても、前世代人にはワ行音表記は見られず、この世代人にはワ行音表記が散見されることは、社会の音韻変化の様相を伺わせる。即ち、平安末期と院政期前期との間には、大きな変化はなかったと推測できるが、院政期の前期から中期頃にかけては、変化の度合が少し大きくなって来たことを推測させる。

又、法然の書状について検討してみると、彼は、ほとんどハ行転呼を起した表記が見られないことがわかる。

13、法然

(は) あはれみ (哀) ・うけたまはり (承) ・おはします (御) ・くはへ (加) ・くはしく (詳) ・候は・たまは (給) ・たまはり・つかはし (遣) ・ねかはむ (願)

(ひ) あひかまへて (相) ・あひた (間) ・おこなひ (行) ・ことおこなひ (異行) ・をこなひ (行) ・おもひ (思) ・さふらひて (候) ・したかひて (従) ・たとひ (仮) ・ねかひ候 (願) ・ふるまい (振舞)

(ふ) 思ふ・たまふ (給)

(へ)うへ(上)・かへすく(返)・候へ・たへ(耐)

(ほ)おほす(仰)

法然の書状には、「ふるまい」の一例が見られるのみである。彼は、院政期中期とは言つても、前期とあまり隔たつた生まれではなく、しかも、彼の書状は晩年の鎌倉初期に書写されたものが全てである。これは、彼の言語習得期の音韻状況が依然晩年の表記にまで反映していることを伺わせるものである。法然の八行音表記は、院政期中期の世代人といふより、前期の世代に属するものかと思われる。

(4) 院政期後期に生まれた世代の表記

この期に属する人は、藤原定家・親鸞・恵信尼である。この世代の表記は、前世代よりも更に、八行音表記が崩壊している様相が伺われる。40歳の年齢差がある、法然の弟子である親鸞の表記には、凡そ4割の、又、親鸞の妻の恵信尼には、凡そ2割の語に八行転呼音の表記が見られる。音韻の変化の度合も、前世代人よりも急激な変化の様相を見せていることが察知されよう。

14、親鸞

(は)あはれ(哀)・あはれに(哀)・あはれみ(哀)・あはせ(逢)・あらはす(表)・いはむや(況)・うけたまはり(承)・うたかはねは(疑)・おはします(御)・かなはず(叶)・かはる(変)・きはす(嫌)・くはしう(詳)・候は(給)・たまはり(母)・あらわす(表)・かわり(代)・きわ(際)・きわまり(極)・きわまる(極)・きらわす(嫌)・すなわち(則)・たまう(給)・とわれ(問)

(ひ)うたかひ(疑)・したかひて(従)・たまひて(給)・ちかひ(誓)・はからひ(計)・うたかい(疑)・ちかい(誓)・つくろい(繕)・とい(問)・はからい(計)・もてあつかいて(扱)・わつらい(煩)

(ふ)あふ(逢)・あふて(言)・うたかふ(疑)・おもふ(思)・かふる(被)・たまふ(給)・たまう(給)

はからう(計)・めしつかう(召使)

(へ)いへり(言)・うへ(上)・候へ・たまへは(給へり)となへ(唱)・のたまへり(宣)・むかへ(迎)・おしえ(教)・そえる(添)・となえて(唱)・ムカエトリタマフ(左訓)

15、恵信尼

(は)あはれ(哀)・あはせ(逢)・あるいは(或)・うけたまはり(承)・うけ給はり・うるはしく(愛)・おはしまし(御)・おはす(仰)・思はず・かはり(代)・かはる(愛)・さは(然)・候はん・たまはりて(給)・給は・つかはし(遣)・は(母)・は(め)母奴)・は(め)く(母)・みそなはし・めならば(女童)・めのわらは(女童)・やしなはせ(養)・わつらはしく(煩)・わらはへ(童)・くりさわ(粟沢)・しわふく(咳)・たわこと(譎言)・つわき(唾)・おわり(終)

(ひ)あひた(間)・あひまいらす(相)・うたかひ(疑)・おもひなし(思)・したかひて(従)・たとひ(仮)・つかひ(使)・あいくし(相)・あいまいらせん(逢)・はからい(計)・まよいけれ(迷)・おい(甥)

(ふ)けふ(今日)・さふらふ(候)

(へ)あつらへ(逃)・うへ(上)・思かへして(返)・かこのまへ(加古前)・かそへ(數)・かまへて(構)・候へは(給へ)・つたへ(伝)・ふるへて(震)・まへ(前)・おしへて(教)

(ほ)おほかた(大方)・おほく(多)・おほす(仰)・かほ(顔)・なほ(猶)・なほも・いとをしき(愛)・いとをしさ・お(う)むひやう(大温病)

16、藤原定家

藤原俊成の子である定家については、先学の多くの研究が見られる。⁽²⁾ 山内育男氏の次の文章に示されるように、定家

の書写した文献には(自筆の書状ではないが)、表記にゆれのあることが認められる。院政期後期生まれ世代の混乱状況が、そこには如実に反映しているわけである。

「そのかなづかいは晩年にいたるまで、個々の語については、揺れがあつたと見るのがもつとも穏当ではあるまいか。定家六十歳以後の書写かと言われる御物本『更級日記』(大野氏によれば、「仮名遣の統一」があるとされる文献の一つ)においてさえ、たとえば、「家」に「いへ」「いゑ」、「勢」に「いきおひ」「いきほひ」「いきをひ」などと、表記の統一を欠く若干の事例を指摘しうる」⁽³⁾

| 書写者 | 表記 | |
|-----|----|-----|
| | は | 転呼音 |
| 法然 | 10 | 0 |
| 親鸞 | 16 | 9 |
| 惠信尼 | 23 | 5 |
| 法然 | 8 | 1 |
| 親鸞 | 5 | 7 |
| 惠信尼 | 7 | 5 |
| 法然 | 2 | 0 |
| 親鸞 | 6 | 3 |
| 惠信尼 | 2 | 0 |
| 法然 | 4 | 0 |
| 親鸞 | 7 | 4 |
| 惠信尼 | 12 | 0 |
| 法然 | 1 | 0 |
| 親鸞 | 2 | 2 |
| 惠信尼 | 5 | 3 |
| 法然 | 25 | 1 |
| 親鸞 | 36 | 25 |
| 惠信尼 | 49 | 13 |

言語の習得を院政期後期に果たしたこの世代人の表記の混乱の程度は、その前の世代人の混乱が散見する程度であつたのに比して、大きいものであることがわかる。

又、平安時代の為房夫妻でも伺われた如く、親鸞夫妻に於ても、女性の表記の保守性が認められるわけである。以上、平安後期から院政期後期までの各時期を、ほぼ30余年に分かつて、その時期に生れた人々の表記差を比較して

みた。本稿で取り上げた書状の量が充分でないことは、筆者もよく自覚しているが、それであっても、右に述べた如く、院政期中期頃を境にして、その頃生まれの世代と、以降生まれの世代とでは、表記傾向に大きな異なりが見られることは確認され得るようである。それが、社会の音韻状況の忠実な反映であるかどうかは、もう少し資料の数を重ねて論述しなければならぬところである。これらをまとめると次掲の如くになろう。

- (1) 平安後期に生まれた世代の表記——揺れ微弱
- (2) 院政期前期に生まれた世代の表記——揺れ微弱
- (3) 院政期中期に生まれた世代の表記——混乱散見
- (4) 院政期後期に生まれた世代の表記——混乱増加

三、書写年代と書写者の年齢

書写者が長命で、しかも晩年に書写された書状は、彼らの言語習得期とは、社会の状況の異なつた時期に於ける存在となる。例えば、

| | | |
|-----|--------|----------|
| 俊成 | (90歳没) | 58歳以降の書写 |
| 法然 | (79歳没) | 60歳以降の書写 |
| 親鸞 | (89歳没) | 69歳以降の書写 |
| 恵信尼 | (86歳没) | 74歳以降の書写 |

等は、長命であるが故に、書写年代と言語習得期とは、大きな隔たりのある例である。前二者の俊成と法然とは鎌倉初期に書状を書写し、後者の親鸞と恵信尼とは鎌倉中期に書状を書写しているからと言って、彼らの書状から把握できる言語傾向は、即鎌倉初期や中期のものと断定して良いか甚だ疑問である。

前節で述べた通り、一個人に於て、言語習得期に形成された表記形態が、晩年まで大きな変化を起こさないという仮説が成立するならば、俊成・法然の表記傾向は院政期の前半頃のものであり、親鸞や恵信尼の表記傾向は、院政期末から鎌倉極初期頃のものであると判断される。

現代の社会に於ても、次の調査報告があり、院政・鎌倉の過去の時代にも、この結果はあてはめられるかと思う。

「書きことばの分野についても、やはり同じ研究所の新潟県長岡市での調査がある（昭和三七年）。これはもっぱら現代かなづかい、当用漢字など、戦後政府が実施した言語政策が一般市民にどのように普及浸透しているかについての調査であった。これによると、たとえば、現代かなづかいは学歴別、年齢別、男女別いずれの層においてもよく受け入れられている。わずかに高年齢層において歴史的かなづかいを支持する傾向が見られる。また、当用漢字の新字体も、概してよく受け入れられている。ただここでも高年齢層の人たちは、旧字体を支持する傾向がある」（傍線金子）

更に、ハ行転呼音表記が、治承四年（一一八〇）から元暦二年（一一八五）頃に集中して見られたが、この治承四年当時、前節で取り上げた各人は何歳であったかを見れば、青年層を中心とした若い人々にハ行転呼音表記があり、壮年・老年層にはそれが見られないことも納得がいくわけである。

（治承四年当時の年齢）

| | |
|-------|-----|
| 藤原俊成 | 66歳 |
| 西行 | 62歳 |
| 平清盛 | 62歳 |
| 皇嘉門院 | 58歳 |
| 平経盛 | 56歳 |
| 後白河法皇 | 53歳 |

| | | |
|------|-------|-------------|
| 法然 | 47歳 | 八行転呼音表記(極少) |
| 寂蓮 | 41歳 | 八行転呼音表記(少) |
| 平宗盛 | 33歳 | |
| 源頼朝 | 33歳 | 八行転呼音表記(少) |
| 建礼門院 | 25歳 | 八行転呼音表記(少) |
| 藤原定家 | 18歳 | 八行転呼音表記(増加) |
| 親鸞 | 7歳 | 八行転呼音表記(増加) |
| 恵信尼 | 誕生2年前 | 八行転呼音表記(増加) |

むすび

初めに、問題として設定したところの、「十一世紀後半から十二世紀前半にかけての年代は、文節中に八行語音を保有する世代とせぬ世代との交替期に相当したと見るのが事実に近いのではあるまいか」との予見は、以上の如く確認せられたことになる。

文献がいつ書写されたかは、国語史記述を進める上で、重要な鍵の一つではあるが、それに加えて、その文献の書写者の年齢を考慮することも、今後の研究では必要であろうと思う。

又、同世代人であっても、保守的な言語傾向を示す人の文献もあれば、進歩的な傾向を示す人も見られるわけで、それが、単なる個性の差によるものなのか、男女差等の要因によるものなのかも重要な考察視点である。確かに恵信尼は夫の親鸞よりは、和語の語中・語尾の八行音表記に関しては保守的傾向を示す。ところが、日常の言語と少し性格の異なる、学習して修得するところの漢字音の表記に関しては、親鸞の方が保守化傾向を示すようである。

このように、国語史の記述研究は、一つ一つの性格を異にする言語が、微妙にからまっているところを解きほぐしていくものであろう。一つだけの傾向で、その文献をすべて述べつくすことは、その文献を誤って理解することになろう。本稿では、わずか一項目の分析にしか過ぎなかったが、鎌倉時代語の初期の傾向について、書写した人間を視点として考えてみた。

大方のご批正を賜われれば幸甚である。

注

- (1) 築島裕『国語の歴史』（東京大学出版会、昭和52年11月）
小林芳規「訓点資料に現れた中世語について」（『広島大学文学部紀要』第32巻1号、昭和48年）
- (2) 大野晋「仮名遣の起源について」（『国語と国文学』昭和25年12月）
馬淵和夫「平安末期の母音」（『日本韻学史の研究』第二巻）、日本学術振興会、昭和40年3月）
馬淵和夫『国語音韻論』（笠間書房、昭和46年）その他。
- (3) 『講座 国語史 2 音韻史・文字史』（大修館、昭和47年9月）599頁
- (4) 南不二男『現代日本語の構造』（大修館、昭和49年）50頁
本調査は、以下の論考に依っている。
永野賢・高橋太郎・渡辺友左「戦後国民各層の文字生活」（『国立国語研究所報告』29、秀英出版、昭和41年）